

研究ノート

「ライトノベル」「少女小説」ジャンルの再検討

——両性一元的文学史観点からの再整理——

高木 聡 司*

序／

現在、「ライトノベル」と呼称される作品群に関する研究は増加しつつある。しかし、この分野をめぐる文学史記述については未だ不十分であると言わざるを得ない。作家等による個人コレクションの延長上で行われている編纂¹、文庫の出版史に特化した論文²はあるが、こちらも各文庫の刊行期間史であり、個々の作品が有機的に配列されているとはいいがたく、とりわけ対象とする読者層の性差においては大きな断絶がある。現在「ライトノベル」と呼称される作品群について、その呼称が与えられるための定義が明確でないことに加え、「ライトノベル」は「男子中高生を対象としたもの」であり、同様の年齢層を対象とする現代の「少女小説」とは別の物であるという暗黙の前提が存在するためである。しかし、この両者を峻別するものが何であるかは学術的に明確ではなく、出版元、レーベルから区別されているのが現状であり、歴史的な脈を踏まえればその区別は決定的なものではないと言わざるを得ない。

現在、出版元ではなく作品群に着目した文学史では、いくつかの出版社が刊行するガイドブックが、また定義論における学術論文では鈴木章子「ライトノベルに関する一考察」³が存在する。ガイドブックの一冊、日経BP社『ライトノベル完全読本』(2004)は、装丁、当事者の視線などの点で要件を絞った上で、男性向け、女性向けを並列した年譜を掲載しているが、しかし文脈としては「ライトノベル」と「少女小説」は別個のものとして取り扱われている。その結果、歴史的研究は、そのどちらかのみを取り扱う片面的な記述か、別個のものとの並列にしかかなり得ない。大森望・三村美衣の対談書籍⁴において、男子中高生向け、女子中高生向けの両者はそれぞれ時系列に沿って語られてはいるが、その関係性を論じるには至っていない。しかし、作品群の多様化によって、出版形態やジャンルに属する要素を囲い込む形での定義はもはや不可能となっている以上、統合された文学史とその上での位置を関連づける形で中心核となるものを定義づけていくべきである。

そのためには、まずライトノベルと現代の少女小説について、前史を整理しておく必要がある。

大森・三村の対談において、ライトノベルの前身は角川書店を中心に刊行されていた「ジュブナイルSF」群、そして朝日ソノラマの単行本シリーズ「サンヤング」であると述べられている。さらにその前身として児童向けSFは1950年代中頃から急速に海外作品が導入、1967年の盛光社の参入により光瀬龍『夕ばえ作戦』(盛光社1967)、眉村卓『なぞの転校生』(同1967)、筒井康隆『時をかける少女』(同1967)などの作品が刊行されたことで日本人作家の作品が定期的に一定数刊行される契機となった。このように既にSF作品は小学校高学年から中学生、高校生に向けたエンターテインメント作品として確固たる位置を占めていた⁵。

一方、現在刊行されている少女小説文庫群の前身として位置づけられているのがジュニア小説である。その代表格は、女子中高生向けの青春小説媒体として雑誌『小説ジュニア』(集英社1966-1982)に連載され、コバルトブックスとして刊行、後に媒体をコバルト文庫に移して発展した作品群である。また1973年に刊行が始められた秋元文

キーワード：少女小説、ライトノベル、ジュブナイル、教養小説

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 共生領域

庫（秋元書房 1973-）もまた女子中学生向け作品を取録した文庫であり、少女小説文庫の前身に位置すると考えられる^{vi}。

これらの作品群は、基本的にそれぞれの性を対象としてはいるが、明確に共通している点がある。それは、どちらの作品群においても主人公および周辺の少年少女は結末において成長を果たし、現代社会に参画する大人への一歩を踏み出すという点である。前掲のSF小説群の多くは、各エピソード、非日常の教訓を結末に配するものであり、主人公たちが社会の成員として成長することを目的とした構造を有している。ジュニア小説における異性もまた同様であり、結末においては異性との出会いや恋愛を越えたその先の成長が描写、暗示されている。成長を巡る描写について、ライトノベル、少女小説に関する先行研究の多くが、「教条性のくびきからのがれている」「自由に自分自身である」「成長しない自己を肯定する」ことを定義に加えている一方で、相川美恵子、池田浩士による『キノの旅』（時雨沢恵一 メディアワークス 2000-）論^{vii}では、ライトノベルは教養小説の新しい試みであるとしているなどの見解もある。

果たしてこれら「ライトノベルの前身」からの歴史において教育的意図は断絶したのか。まったく別種、独自の定義を持つ娯楽小説なのか。本稿の目的は、1970年代以降のジュニア小説以降の中高生向け小説作品の歴史を整理することで、「ライトノベル」が内包する教育小説性を明らかにするとともに、無力な少年少女における補正措置と不作為への態度を考察することで「ライトノベル」の定義、本質的性格をより明確にしようとするものである。

1 / 「ジュニア小説」と現代「少女小説」、「ライトノベル」の連続性

ジュニア小説とは、狭義には集英社の中高生女子向け文芸誌『小説ジュニア』において掲載され、あるいは「コバルトブックス」「集英社文庫 コバルトシリーズ」として刊行された作品群であり、広義には1960年代から1980年代半ばにかけて、中高生のアイデンティティ、階層、あるいは性といった年代特有の葛藤を描いた作品群である。主に学校教育制度、家からの逸脱——すなわち偏差値等への反感、恋愛やゲームセンター等盛り場への関心とそれらに対する戒め——、また貧困等の社会への関心や将来への不安を経験した上で、社会および家庭の中で生きる主体的な個人として再生し、彼らの成長に回収される。性への関心と愛との差異化、父親との和解など、そこに描かれた成長は多様だが、一部の例外を除き共通するのは前述の逸脱を自己目的化しないことにある。また、ジュニア小説における作家は読者にとって大人であり教育者として認識され、投稿欄において読者の相談を受ける局面では作家は大人であり指導者であった^{viii}。ジュニア小説、『小説ジュニア』はれっきとした教育の媒体だったのである。

しかしジュニア小説および『小説ジュニア』は、一部の性を巡る作品や、『小説ジュニア』本誌で掲載された女子中高生の性を取り扱った記事が不健全であるとの批判の槍玉に挙げられることとなった。一連の批判のなかで、性表現を巡る他の批判と一線を画したのが砂田弘である。性にかかわる描写のエスカレートに言及こそするが、青少年の健全育成に言及する他の批判とは異なり、これら作品と表裏にあるジェンダーへの囲い込みの存在を指摘、ジュニア小説はゆがんだジェンダー観に支配されているものであり、「日本に少女小説は実在しない」との批判を行った^{ix}。砂田は当時のジュニア小説が読者を家庭の主体として成長させることを目的とした教育意図と、性への関心以外に目を向けさせないという意図を指摘したのである。この砂田の批判は、欧米の少女小説に登場する、自立に向かう少女を念頭に置いてなされたものであるが、1960年代当時のジュニア小説、ジュニア雑誌の特徴を総体として捉えたものであった。ジュニア小説においては、「恋愛経験を経てその先の成長へと回収される」という成長物語のフォーマットに属するものが多数であり、恋愛を経て主人公たちに結ばれる関係性は、女性が従属的なものであることが多く、少年もまた家庭へと回収されていた。またコバルト文庫が1970年代刊行していた手記、実録ものにも女性の博愛を強調するものが並立している*ことから、『小説ジュニア』の意図するジェンダー観は一部の例外を除いて旧来のまま維持されていたと考えるべきである。恋愛の自己目的化を戒める作品から窺えるように、恋愛および性を巡る主題はむしろ囚われてはいけぬもの、反面教師として扱われていたというのが実情であろう^x。

その後1970年代末から1980年代にかけて、『小説ジュニア』において、投稿コーナー出身の若い作家によって「自由に自分自身であること」を重点とした作品が登場し始める。その中の代表的作家、氷室冴子はジュニア小説作家として数点の作品を書いたのち、「少女たちが自由に自分自身である場所」として寄宿舎を舞台とした『クララ白書』

(集英社 1980) を発表した。戦前の少女小説が描いてきた聖域を踏襲し、少女たちが自分自身であるために必要な外界からの隔絶をエンターテインメントに昇華した『クララ白書』は絶大な人気を博した。続編『アグネス白書』(同 1981-82)、平安時代を舞台とする『なんて素敵にジャパネスク』(同 1981-) も同様に少女が自由である場が作品世界として設定された作品である。

このような変遷の中、1982年、雑誌『小説ジュニア』は『Cobalt』に改題、ジュニア小説は狭義のジャンル名としては終焉を迎えた。「ジュニア小説作家」としてデビューした後、1980年の『クララ白書』を境に「自由に自分自身である場所」の描写に傾斜していく氷室冴子の転換は、ジュニア小説とコバルト少女小説の境界面である。先行研究においても、菅、大森、三村に共通した理解としてジュニア小説の終焉とコバルト少女小説の発生は、新井素子『あたしの中の…』(1977)によって確立されていた一人称の文体と、少女たちの自由を鍵としている。また、それまでの性を巡る描写は、しばらくの間は残留していた^{xii}が、その後影を潜めることとなった。

しかし、氷室が選んだ手法は、中高生の直面する葛藤からは徐々に軌道を外れていくものでもあった。氷室作品と、氷室が作り上げた「自由に自分自身でいられる空間」の手法は、少女を暗い葛藤や心理的暗部、女性の窮屈な共同体から切り離し、個人を魅力的に描く手法であった一方で、彼女たちの自由は無視と紙一重であった。氷室より早く、富島はジュニア小説『二年二組の勇者たち』でいわゆる問題児ばかりが集められたクラスを描いたが、この作品においても彼らの自由は無視と背中合わせである。このように公教育およびジェンダーの束縛は偏差値、風紀の両面に及び、そこから逃れるためには無視あるいは大人の諦観を前提としなければならなかった。加えて、この自由は一時的かつ脆弱なものである。『クララ白書』における寄宿舎内の生活は、基本的には外部に何の影響ももたらさない。漫画家を目指しクララ舎で努力を重ねた友人は数少ない例外だが、彼女とていつでも退学させることができるという強権があった。「少女が矯められない」世界、すなわちこの時期に賞賛された、終期のジュニア小説、少女小説における自由の多くが、無視と引き換えの、対外的には問題視されないがゆえの自由であった。これらの作品は最終的には従属する性、社会的に不可視な性であることを容認し、活用している。それは外部の社会における自主自立とは程遠いものであり、社会進出志向の作品とは比較すべくもない性質のものである。たしかにアクティヴな女性が男性による後詰を得るという構造、手法は、1970年代には推理小説において辻真先『仮題・中学殺人事件』(朝日ソノラマ 1972)などで既に登場しており、氷室の時代や同時期の少女小説の特徴とは言えないが、比較的女性の能動性が評価されている作品においてさえ後詰めに相手役男性が存在することが常態化していることは、高橋準が前田珠子『破妖の剣』シリーズ(集英社 1989-)における主人公少女の依存性と自律の不十分さを指摘している^{xiii}ことから明白である。

このような一方、作者主観の限りにおいては異質であったのが1984年から刊行された久美沙織『丘の家のミッキー』(集英社 1984-1989)である。久美の意図において、地方への転出を余儀なくされた少女・未来が都市部私学への再入学を第一の目的として自己実現を図る物語であったはずが、読者にとっては地方という「選択肢がさほど無いがゆえに追い立てられることがない」領域での恋物語と認識されており、作者と読者との間にいくつかの軋轢を引き起こすこととなった。『丘の家のミッキー』をめぐる久美と読者の軋轢は、同時に読者が形成する内部規範と作家の意図の衝突でもあった。ジュニア小説において発生した、読者の望む能動性と外部ジェンダー規範が望む受動性の衝突は、『丘の家のミッキー』では、読者の望む受動性と久美が描く少女の能動性の衝突として発生した^{xiv}。氷室、久美らは読者の意識上において「大人」ではない「お姉さん」に属する作家、教育する側ではなく身近な存在として、現代の少女小説に対する複数の先行研究が扱い、少女たちの自由の象徴とみているが、しかしその自由は必ずしも独立したものではなかったのである。

一方、同時期の「中学生、高校生を中心登場人物とした小説」で人気を博したのがSF小説である。これらは、映画原作となる、あるいはNHKによって1972年からテレビドラマ化されるなどして知名度を上げ、筒井康隆、眉村卓などを代表的作家として拡大した。しかし、SFもまた、ジュニア小説同様の教育意図から無縁ではなかった。これには、1960年代後半のSFブームの中で、科学技術への憧憬やそれに基づく未来像よりも社会科学への考察を重視する^{xv}文学者サイドの要請や、あるいはジュニア小説との作家の共通性が影響しているものと考えられるが、これらは一定の教訓的内容を含むものを中心に展開した。登場人物や対象層、供給側の名称からのちに「ジュブナイ

ル SF」と呼称されるジャンルを形成したこれらの作品は、社会的主体、社会的正義の体現者予備軍としてあるべき少年少女の姿を描くことに傾斜し、これらの姿勢はとりわけ少年たちに求められる社会的態度に現れていた。

しかし、ジュブナイル SF にもまた変化の時が訪れる。1977 年には新井素子による『あたしの中の…』が奇想天外 SF 大賞を受賞したことである。同作は 1978 年 SF 文芸雑誌『奇想天外』に掲載、奇想天外社から単行本が刊行されたのに続いて 1981 年には集英社コバルト文庫版が刊行、1983 年 NHK によってラジオドラマ化された。一連の動きの中、『あたしの中の…』はより広い範囲に知られ、少女の一人称による表現形式と、会話を進行する物語は、読者、視聴者に浸透することとなった。また、1971 年には平井和正『超革命的中学生集団』（朝日ソノラマ 1971）によって「教条性のくびきから逃れている」との大森・三村の定義^{xvi}に合致する作品も登場しはじめている。

これら SF 小説をとりまく環境の変化の中で刊行されたのが、笹本祐一『妖精作戦』（朝日ソノラマ 1984）である。中高生向け SF 作品として執筆され出版社持ち込みの形で刊行された『妖精作戦』は、その後四部作として完結（同 1984-1985）した。当時大学生であった笹本は、既存の作家よりも読者層に年齢に近いことを強みとして自覚していたことを『妖精作戦』新装版（朝日ソノラマ 1995）後書きにおいて明言しており、読者層である中高生が好むものを貪欲に導入した。映像表現を念頭に置いた描写や場面転換、会話主体で進行する表現に加え、オールナイトの映画館、オートバイなどの中高生の関心ある要素を導入し、寄宿舎という領域を確保した。その中には『時をかける少女』など映像化されたものを含め「少女向け」作品の要素を含むこと、また少女向け作品を視聴する男子高校生が描かれるなどしている。また、物語終盤で自由でいられる領域の脆さを描くところでは、少女小説の構造を踏襲しており、吉屋信子『屋根裏の二處女』（国書刊行会 2003、初出は 1920）、氷室『クララ白書』において寄宿舎生活の家が強権によって剥奪される過程と、『妖精作戦』における米軍と自衛隊の侵攻は同種の役割を果たしている。

また、構造のみを総括すれば、『妖精作戦』は最終的には失恋という「他者」を経た少年の成長に回収される物語と解することも可能な作品である。外界から隔絶された空間での娯楽を終了し、「新しい季節」への一步を結末とする『妖精作戦』は、恋愛や性への関心を自己目的化することを戒め、その先の成長を回収地点としたジュニア小説の構造とも共通している。

さらに、外界から遮断された空間で自由を謳歌する少年たちと、その空間の脆さという少女小説の構造が採用されていることは、男子中高生もまた女子中高生同様に外界の圧力に曝され、「自由に自分自身である場を求めている」ことの表出である。少女小説の手法を取り込みながら、不完全ながらもジュブナイル SF からライトノベルへの転換点を文学史上に記した『妖精作戦』は両性の一つの結節点となっている。そしてこのような男女差について、両者に差異はほとんど存在しないことを指摘したのが中島梓である。中島は二次創作同人誌活動と「おたく」文化を取り上げ、空想の同性愛の世界に浸る「JUNE」^{xvii}少女と、同じくアニメ、マンガに傾倒する「おたく」少年を「選別社会に背を向けたゲリラ」と評し、その原因として、少女たちがファッション、外形、風紀などに追われるのと同様に、少年たちもまた成績や社会的地位による選別、上昇志向に追われ続けていること、加えて男性には逃げ場がないことを指摘した^{xix}。

ところが、『妖精作戦』以後のライトノベルにおいても、完全に外界に背を向けきることはできなかった。さまざまな特技、個性による大人への対抗という面白さを持ちながらも、外界から隔絶された空間を維持したまま終了する物語は 1980 年代から 90 年代にかけては少数派であり、1989 年の首藤剛志『都立高校独立国』（徳間書店 1989）などがあるのみである。宗田理『ぼくらの七日間戦争』（角川書店 1985）はさまざまな特技を持つ少年たちが学校に反発し、夏休みに河川敷の廃工場に立て籠もるが、その空間も短期間で終末を迎えている。いずれにせよ外界からの離脱は一過性のものである。それは、中島の言う「逃げ場」のなさに加えて、閉鎖空間外での葛藤に向き合う必要性を自覚すること、それらを解決し成長を果たす物語のカタルシスから、作家、読者の双方が逃れることができなかったということでもある。強度に内面化されたジェンダーと、彼女たち自身が所属する共同性ゆえに完全な独立を選択できず、しかし自由を渴望している少女たちと同様に、男子中高生にとっても受験戦争、家族への忠誠などの束縛は大きく、「小説を娯楽とする教育水準の男子中高生」と彼らを想定する作家にとって、完全な独立と能動性を得られないことを認めながらも完全な停滞と内向性の中に安住することは選択しがたい結論だった。必然的に、少女小説において生じた軋轢は、一定層の男子中高生——彼らはその束縛を内面化し、立場としては「少女」にきわめて近い——を想定する作品においても生じていたのである。そして、無力感を抱きながらも停滞を望まず、自

己を貫徹したいという欲求は、読者の性別問わず、何らかの形で外界への対抗手段と、それを可能とする条件設定を求め、また外界と閉鎖空間の境目をさまよっていくこととなる。

2 / ライトノベルと自発的な能動性

前項での経緯とほぼ同じ1970年代から1980年代にかけて、海外翻訳作品を中心に主に中高生を対象とした文庫メディアでのファンタジーが出版市場に広がり始める。1979年にはハヤカワ文庫FT、1984年には社会思想社教養文庫によるゲームブック、1985年には富士見ドラゴンブック、ドラゴンノベルズが刊行される。とりわけ富士見書房と社会思想社によるロールプレイングゲーム紹介書籍はファンタジー作品の作品世界構築に大きな影響を与えることとなり、なかでも1985年に登場した角川文庫青版^{xix}、1988年の富士見ファンタジア文庫は積極的にファンタジーを取り込み、現在に至るライトノベルの代表的出版元の地位を築いた。

日本におけるファンタジーは、中高生向け文庫媒体を中心に水野良『ロードス島戦記』（角川書店1988-1993）など架空の歴史、大河ものが文庫レーベルを支えたが、一方で10代の主人公によるアイデンティティ構築、直面する課題との葛藤を描いた冒険と成長の物語もまたファンタジーを取り込んでライトノベルの主流を形成した。1990年代の代表的なファンタジー作品として神坂一『スレイヤーズ!』（富士見書房1990-2000）、秋田禎信『魔術師オーフェンはぐれ旅』（富士見書房1994-2003）などが挙げられるが、これらはいずれも自身が属する枠組み、与えられた教育に流されず自分自身であることを貫徹する物語である。しかし本質的には中高生が直面していた葛藤、とりわけ自己の実存に関わるものを、形を変えて描いた作品であることには変わらず、ファンタジーは中高生にとって共感しやすい作品として、集英社コバルト文庫など女性向けの媒体に置いても市場を席卷した。両性のジャンルで発生したファンタジーブームは、中世風の異世界のみ留まらず、従来のジュブナイルSFに近い形を取って現代社会も舞台とし、中学生、高校生の直面する葛藤を描いた。

しかし、『妖精作戦』が寄宿舎の内側で完結できなかつた、成長の物語を放棄できなかつたように、ファンタジーにおいても成長と、自由であれる居場所、状況の終焉は避けられず、また居場所に安住する危険性は常に暗示され続けた。

早見裕司『夏街道 —サマーロード—』（徳間書店1989）もまた外界から遮断された空間での停滞を拒否する一作である。本作では登場人物たちが図書室と喫茶店を居場所とする一方、作中の事件において登場する鏡の中の世界には、熱源のない夏が描かれる。とともに、その支配者は、停滞しよどんだ池の水となって崩れ去る。『夏街道』は学校図書館という「居場所」を舞台にした上で、主人公少女が抱える姉の死という過去への呪縛を絡めながら、停滞への恐怖、あるいは停滞を拒絶する意思を描いた作品であった。

また、直接外部の社会と切り結び、中高生の苦悩を描いたファンタジーには麻生俊平『ザンヤルマの剣士』（1992-1998）がある。コミュニケーションが断絶して個人が引きこもる社会と、その中で生じる表層的な目的意識に基づく集合の危険性を描いた作品は、孤独やイデオロギーという傷つかない居場所からの離脱を描く一方で、ファンタジーの条件設定により力を持ち、行使することの責任を問うものであった。

安住への批判、居場所からの離脱という構造は少女小説においても同様であり、代表的なものでは小野不由美『十二国記』（講談社1991-）は不作為と諦観の批判を強調した。それは、女性であることを排除した作品世界を前提とする自己責任論である。近代法的にはなんら責任を追及されるべきではない結果についても非難が及んでいる点で問題のある部分である^{xx}にせよ、不作為に向き合う特徴を有している。

これらのライトノベルは、ともに特定の状況を経た成長を描き個人の主体性や責任を説く、教育的小説の一面、すなわち旧来のジュニア小説、ジュブナイルSFの構造を継承している。またこのような教育的小説の側面は、ライトノベルがファンタジーを導入することによって、より強化された。大人と渡り合えるようになった少年たちには法的にいう期待可能性は問題にならず、むしろ免責要件を剥奪し強制的に義務と責任に耐えうる倫理的志向が要求されている。異能の登場しない現代の青春を描いた作品であっても、その姿勢だけは不変だと言えるだろう。そこに描かれるのは必ずしも自由に外界に飛び出す少年少女ではなく、さまざまな束縛の下にあり、一定の教育の下にあり、規範を内面化した「少女」の内面を持つ者たちである。

1990年代、ライトノベルは少年少女を権利主体とすることで、義務と倫理という新たな束縛をもたらし、少年少女の主体形成を複雑化させ、わずかな文学的評価を得た。その結果生じた窮屈さもまた、停滞を望まない作家と読者の姿勢の産物である。

元より現代社会における自己の実存、アイデンティティを巡る葛藤と絡み合う形で発展してきたジュニア小説、ジュブナイルSF、そしてライトノベル、少女小説に至る系譜は、制度、教育に「流される」ことによる自我の喪失を拒否する姿勢を持つものであり、外界から遮断され不可視である状態に安住したままの自由もまたアイデンティティと関わる葛藤であることには変わりがない。必然的にライトノベルは公教育や社会における共同性に流される状態にも、法的無能力、法的制限能力のもと不可視な状態での停滞にも懐疑的な存在として成立せざるを得ない。結果として、ライトノベルが持つ教育性は、ジュブナイルSF、ジュニア小説から脈々と今なお引き継がれているものであるとともに、SFやファンタジーとの合流を経て退路を断ち、主人公たちを最初から権利主体として振る舞うべく仮想されているが、しかし立ち止まる時間を与えている点で新しい存在となっている。ライトノベルの定義において挙げられる「成長しないこと」の肯定は、一時的なもの、立ち止まる場にすぎないものであること、またジュニア小説、ジュブナイルSFからの「変化」はかならずしも「断絶」とはなっていない連続したものであることを見直すことこそ、ライトノベルを読み解く一つの鍵になると考える。一方で、成長の物語であることを自覚し、その成長のために提示されるものがご都合主義的であることや成長自体の虚構性、強制性に懐疑を抱く作品も登場している^{xxi}など、教養小説性を巡る議論も今後の焦点となるだろう。

おわりに／

本稿では、ライトノベルの文学史を、対象とする性別、刊行された時期をまたぎ、ライトノベルおよび現代の少女小説がジュブナイルSF、ジュニア小説から引き継いだ教養小説としての性格を整理した。

ライトノベル、少女小説は定義としてきわめて間口の広いものであり、本稿の文脈に収まらない作品が存在することを筆者は否定するものではない。現実として、教育、居場所、成長そのものに懐疑的、自覚的な作品はライトノベルの中に息づいている。それでもなお、立ち止まることと停滞を恐れること、社会的主体として参画することへの不安と希望の振れ幅をコアとして、そのどちらにも振り切らない作品群は生み出され続けるだろう。両性の中高校生、若者がそれぞれに背負った「生きづらさ」「流されている感覚」と向き合い続ける限り、アイデンティティと居場所を巡る作品は今なお根強く、呼称はジュニアから少女へ、ジュブナイルからライトノベルへと移り変わったように、作品の傾向が変遷したとしても、その本質が大きく変わることはないかと筆者は考える。広大なジャンル、膨大な作品数と速い市場サイクルの中、両性にまたがった文学史を駆け足で振り返ってきた本稿において手の届かなかった点も少なくはない。両性をまたぐ文学史の精度上昇は今後のさらなる課題としたい。

注

- i 代表的なものに早見裕司ホームページ「逝川堂本舗」内「ジュニア文庫博物館」<http://hayami.net/zyunia/zyunia.html>
- ii 玉川博章「現代における青少年向け書籍の発展——ヤングアダルト文庫出版史」『出版研究』35号 日本出版学会 2004 pp.41-64。
- iii 鈴木章子「ライトノベルに関する一考察」『白百合児童文化』17号 pp.77-94。
- iv 大村望・三村美衣『ライトノベルめった斬り!』太田出版2004。
- v 大塚勇三 今日泊亜蘭 瀬川昌夫 古田足日 上笙一郎「座談会 SFと児童文学 大塚勇三」『日本児童文学』第14巻3号 pp.50-67 (1968) の付録的位置づけに当時の児童文学SFが、白木茂によって「SF児童文学作品文献目録」(同 pp.86-74)としてまとめられている。
- vi この点の記述が不明確なのは、秋元文庫の性格が不明確なためである。筆者の調査では井上祐美子、佐藤愛子らの女子中高生向け作品が中心である一方で、早見の調査では終期にはSFアニメのノベライズを出していたことが明らかになっているため、対象層が限定できない。
- vii 相川美恵子「『キノの旅 the Beautiful World』シリーズを読む—ライトノベルズと若い若い読者たち」『いまを読みかえる』(イン

バクト出版会 2007) pp.325-343、池田浩士『池田浩士コレクション 教養小説の崩壊』(インパクト出版会 2008) コレクション版あとがき。

- viii ジュニア小説における作家と読者の関係、教育主体としての位置づけは、金田淳子「教育の主体から参加の主体へ 一九八〇年代の少女向け小説ジャンルにおける少女読者」『女性学 vol.9』(日本女性学会 2001) に詳しい。
- ix 砂田弘「少女小説は実在するか」『砂田弘評論集成』(てらいんく 2003)。
- x 女性の純粋な愛を描いた実録ものとして、山口清人・久代『愛と死のかたみ』集英社 1976 など。
- xi 横川寿美子「『少女小説』かけ足の百年史」『飛ぶ教室 児童文学の冒険 No.2』(光村図書出版 2005) は、「戦前の佐藤紅緑にもつながるような、意外に保守的な少女像、少女観」が、性のタブーを破った新しさの陰に隠されていたことを指摘する。
- xii 氷室冴子『ざ・ちえんじ!』(集英社 1983-1985) における女官の会話などに性を巡る話題は見られるが、主人公少女は巧妙にそこから遠ざけられていることに注意が必要。また、川上宗薫『遺作 死にたくない!』(1986) 解説において、菊村到が川上のジュニア観に言及するとともに、当時のジュニア小説(既に雑誌は改題済み)についてその性表現の存在に言及していることから、1980年代半ばまでは一定量を巡る描写は含まれたと解される。
- xiii 高橋準『ファンタジーとジェンダー』青弓社 2004。
- xiv 久美沙織『コバルト風雲録』(本の雑誌社 2004)、菅『少女小説ワンダーランド』(明治書院 2008) にて言及されている。
- xv 前掲大塚勇三。
- xvi 前掲大森・三村。
- xvii 同性愛を扱った創作文芸、マンガについて、同人誌におけるジャンルは耽美同性愛文芸雑誌『JUNE』の誌名を冠して「JUNE」と呼称される。
- xviii 中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房 1991。
- xix 角川文庫青版はのちにスニーカー文庫の前身となる。またスニーカー文庫は当初ボーイズラブ作品を刊行しており、当時の角川書店は少年向け、少女向けの区別を取らなかったことを附記しておく。
- xx 荷宮和子『バリバリのハト派』(晶文社 2004) p.45 は小野『風の万里 黎明の空』に対して、父王へのクーデターによって王女の地位を追われた少女について「自分のせいでもないのに」と不快感を示している。
- xxi 成長物語、教養小説性への懐疑としては前掲相川、前掲池田における『キノの旅』に対する論が詳しい。作品世界そのものご都合主義、世界の狭さに自覚的であることについては前掲鈴木との指摘がある。ただし鈴木についてはこの点を教養小説の性格への態度とは認識していないと思われる。

Reconsidering Novels for Teenagers: Characteristics Common to Boys' and Girls' Novels

TAKAGI Satoshi

Abstract:

Previous research on “stories for girls” and “light novels” for boys of the 1980s and 1990s in Japan has studied the genres separately, according to the sex of targeted readers. This research note aims to describe a common characteristic of these novels for teenagers by analyzing some influential works in the category without separating them according to the sex of targeted readers. Before the 1970s, there were many educational novels which tried to raise boys and girls to be respectable members of society or family. This characteristic is first found in novels for girls, but is soon found in novels for boys as well. Because these novels for teenagers share this common characteristic, they should be studied without separating them according to the sex of the targeted readers.

Keywords: stories for girls, light novels, juvenile, *Bildungsroman*

「ライトノベル」「少女小説」ジャンルの再検討 ——両性一元的文学史観点からの再整理——

高木 聡 司

要旨：

中高生向け文庫を巡る先行研究は一元的な文学史記述が未だ不十分である。本ノートは、1980～1990年代の中高生向けの文庫小説作品群について、少年向けと少女向けを問わず、文学史上の転換点となった作品を時系列に沿って読み解き、教育小説的側面とその側面に対する読者の姿勢を掴むことで、これらの作品の読者層の性別を越えた特徴に明らかにする。1970年代以前に書かれた、少年少女を社会や家庭の主体に育成しようとする作品に対し、1980年代にはまず少女向けに自由に自分自身でいられる居場所を描いた作品が増加した。それらは、自ら居場所から踏み出し社会的主体になろうとする意思も描いている。そして、この特徴は少年向け作品にも見られるようになる。少年、少女たちは社会や家族の主体になることから逃避しているのではない。このように、同じ特徴が見られるためこれらの作品に関する研究は、読者の性別によって分断されるべきではない。